

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

Q1. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

昔、男ありけり。

Q2. 次の傍線部に含まれる「けり」の用法を答えよ。（新古今集・百人一首）

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山。

Q3. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

京に上りけり。

Q4. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

来て見れば、人もなし。「わが思ふ人は、はや帰りけり」と思ふ。

Q5. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

朝、戸を押し開けて、「朝顔の花ぞ咲きける」と喜ぶ。

Q6. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

唐土に渡りける僧。

Q7. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

月清く照りけり。（和歌中）

Q8. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

文を見て、「古き友は、なほ生きたりけり」とうれしく思ふ。

Q9. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

嵐山に登りけり。

Q10. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

心安く眠りけり。

Q11. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。（和歌の結句）

花ぞ散りける。

Q12. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

月清く照りければ、夜もすがら琴を弾きけり。

Q13. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

我が父、いま静かに眠りけり。

Q14. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

朝起きて、「夜のほどに、庭に雪は降りけり」と言ふ。

Q15. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

男、女のもとに通ひけり。

Q16. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

風吹き、波荒く立ちけり。

Q17. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

いとあはれにありがたしと聞こえける人。

Q18. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

文の道に入りけり。

Q19. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

子を思ひて泣くを見て、「この人も子をもつ親なりけり」と思ふ。

Q20. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

帝、隠れさせたまひけり。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

朝、庭を見て、「夜の風に、花なむ散りける」と惜しむ。

Q22. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

別れてのち、「われこそ、この人をまことに思ひけれ」と知る。

Q23. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

「昨夜、笛の音や聞こえける」と問ふ。

Q24. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

この花、たれか折りける。

Q25. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

帝、いといみじく思ほしけり。

Q26. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

雪降りけれど、出でぬ。

Q27. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと…と詠みけり。

Q28. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。(和歌)

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花…と詠みけり。

Q29. 次の傍線部を識別せよ。

春来にけらし。

Q30. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

かの僧の見ける夢、まさしく現になりぬ。

Q31. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

心安かりければ、また訪ねけり。

Q32. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

物語を見るほどに、「いつしか日も暮れにけり」と驚く。

Q33. 次の傍線部を識別せよ。

古今集に載れる歌なりとぞ言ひ伝へたる。

Q34. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

「鶯の鳴くこと久しくなりにけり。春も暮れぬべし」と言ふ。

Q35. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

世の人の知らざりけることを、この翁はよく知りたり。

Q36. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず。…と詠みけり。

Q37. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

いと哀れと思ひけれど、言ひも出でず。

Q38. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

雪の降る夜、帝、御笛を吹かせたまひけり。

Q39. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

あはれ、夢なりけり。

Q40. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

散りにける桜、なほ惜し。

Q41. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

我れもまた老いにけり。

Q42. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

中宮、御覧じて思し召しけり。

Q43. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

故里に住みける人々、皆絶え果てぬ。

Q44. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

暁の月見けれど、心は晴れず。

Q45. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

「夢か」と疑ひけり。

Q46. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

あらたまの年立ち返る朝より待たるものは鶯の声…とぞ詠みたまひける。

Q47. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

心づくしの秋風に海はすこし遠けれど、…

Q48. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

その夜、雷いたく鳴りて、その音いみじかりけり。

Q49. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

我に告げける人なし。

Q50. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

山里は冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へば。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

Q51. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

いとうつくしと思しめしけり。

Q52. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

かの人の住みける里、今は荒れ果てぬ。

Q53. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

物の音もすすろにあはれなりければ、なほ眠らず。

Q54. 次の傍線部を識別せよ。

人知れずわが恋ひ死なば誰かはあはれと言はまし。

Q55. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

夜もすがら寝られで、「秋の夜は、かくも長かりけるかな」とひとりごつ。

Q56. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

「心づくしの夜の長きを思ふに、よろづ哀れに侍りけり」と聞こゆ。

Q57. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

帝、御覧じける夜、ひとへに月清かりき。

Q58. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

鶯の声に目覚めければ、起きて庭に出でぬ。

Q59. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

「待つかひありて、君こそ来たまひけれ」と思ひけり。

Q60. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

その夜、中將なむ参りける。

Q61. 次の傍線部を識別せよ。

来ぬ人を待つ夕暮れの秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ。

Q62. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

御使ひの帰り参りたるに、ありさまをねんごろに問ひけり。

Q63. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

人々、この別れをこそいみじう嘆きけれ。

Q64. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

もとより知りたることなれど、なほ人に尋ねけり。

Q65. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

「この文をば、人にや見せける」と問ふ。

Q66. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

雪のいと深く降り積もりければ、馬も通はず。

Q67. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる…と詠みけり。

Q68. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

月の明かりければ、夜起きたりける人々、なほ歩み出でぬ。

Q69. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

心細く悲しければ、なほ涙とどまらず。

Q70. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

心づくしの秋風の吹くを聞きて、「もの悲しくなりけり」と思ふ。

Q71. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

使ひの者ぞ、このよしを告げける。

Q72. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

翁、「昔、この寺に尊き聖住み侍りけり」と語る。

Q73. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

故大臣の植ゑける梅、今年もいとおもしろく咲きたり。

Q74. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

帰り侍りけれど、心は留まる。

Q75. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

文の返りごともしなければ、男、いとど恋しさまさりけり。

Q76. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

その庵を見て、「あらまほしき有様にぞありける」と思ふ。

Q77. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

人も通はぬ深き山に、翁ひとり住みけり。

Q78. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

我れ知らぬことぞ多かりける。

Q79. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。

人の去りてのち、「あはれ、思ふことをこそ言はざりけれ」と悔ゆ。

Q80. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。

「夢ばかり見えしほどの面影だになかりけり」と嘆く。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。（伊勢物語・初段）

昔、男、初冠して、奈良の京春日の里にしるよしして、狩りに往にけり。その里にいとなまめいたる女はらから住みけり。

Q82. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。（伊勢物語・東下り）

三河の国、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。

Q83. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。(竹取物語・冒頭)

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。

Q84. 次の傍線部を識別せよ。(百人一首・藤原俊成)

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

Q85. 次の傍線部を識別せよ。(百人一首・崇徳院)

瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

Q86. 次の傍線部を識別せよ。(古今集・在原業平)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして…と詠める歌なり。

Q87. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。(古今集・紀貫之)

結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな。…と詠みけり。

Q88. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。(古今集・凡河内躬恒)

月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける

Q89. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。(古今集・在原業平／伊勢物語)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして…と詠みて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

Q90. 次の傍線部を識別せよ。(古今集・紀友則)

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

Q91. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。(古今集・小野小町)

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

Q92. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。(古今集・凡河内躬恒)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠る…と詠みければ、人々みな感じあへり。

Q93. 次の傍線部を識別せよ。(枕草子・第一段)

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

Q94. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。(更級日記・冒頭)

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかは怪しかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、…

Q95. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。(源氏物語・桐壺・冒頭)

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

Q96. 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。(源氏物語・桐壺)

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

Q97. 次の文章に過去の「けり」は使われているか。(平家物語・冒頭)

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

Q98. 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。(徒然草・序段)

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

Q99. 次の傍線部を識別せよ。(方丈記・冒頭)

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

Q100. 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。(伊勢物語・芥川)

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率て行きければ、草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。